

刊 行 に よ せ て

本年報の刊行は、2009～2013年の5年間にわたるプロジェクトの総括にもあたる。諸種の事情から刊行が遅れてしまい、関係各方面に多大なご迷惑をおかけしたことをまずお詫びしなければならない。

それとともに、2014年4月に、本プロジェクトに対して文部科学省から「A：設定された目的は概ね達成された」という事後評価を受けたことを巻頭で報告しておかなければならない。

これもひとえに基盤となる所蔵資料の情報共有化をはじめとする3事業を推進した、責任者及び担当者、プロジェクト型共同研究8グループのリーダー、及び共同研究者・研究協力者、国際シンポジウムや公開研究会の登壇者、事業の運営企画にあたった学内・外の運営委員、これらの事業をバックアップしてくれた学長、及び大学当局と日本常民文化研究所の職員、そしてなによりも直接役割分担の遂行に邁進してくれた機構関係者の皆さまにこの場を借りて謝意を表したいと思う。残務整理の繁忙の中で謝恩の会さえも設けることができなかつたのである。

この5年間で走馬灯のように脳裏をめぐる。プロジェクト開始早々に東日本大震災が発生した。また、一時的に予算執行の停止などもあり事業の行く方さえ思いやられ、2011年の国際シンポジウムの場では、韓国からの巫堂の一行がクツ儀礼を実際に大学ホールで行い太鼓・鉦の音が鳴り響き、中国上海・青島の海洋大学、韓国慶北大学校、釜慶大学校、木浦大学校との学術交流と、瀬戸内海二神島での合同調査ではお互いの民謡披露、韓国多島海でのアチックフィルムの上映会の折、験の母に映像上で初めて会え感涙にむせぶ古老、造船研究の縁から近藤和船研究所寄贈の資料を展示公開できたことなど、本プロジェクトの範囲の広さ、活動の多様性に今さらながら驚くのである。

さて、本年報は、第1部事業編「2009～2013年度事業報告」で、3事業部門【所蔵資料の情報共有化】【プロジェクト型共同研究の推進】【事業運営の総合的推進】の5年間の活動と最終年度2013年度の事業報告がなされ、本事業の全体を総括している。

第2部論文編では、論文3本、研究ノート4本、調査報告1本、資料紹介2本のいずれも力作・労作が寄せられ、第3部プロジェクト研究活動報告編は、8共同研究グループごとの5年間の調査・研究、その公開成果発表会の開催と成果報告書（『国際常民文化研究叢書』）の刊行を中心に研究代表者が報告を行っている。

最終年2013年度は、渋沢敬三没後50年に当たり、記念事業会が作られさまざまな催しが行われた。本機構では、2014年3月9日、国際シンポジウム「渋沢敬三の資料学—日常史の構築—」を開催、本事業の総括ともなったが、本プロジェクトの目的は、一言でいえば、拠点である日本常民文化研究所が進めてきた海民と民具を中心とした常民文化の研究のノウハウを国際常民文化研究として展開することであった。

国家や民族の枠組みを超え、いずれの社会においても大多数を占める庶民層を「常民」と概念化し、等身大の生活文化を総合的に調査・研究・分析する方法論を確立するという目的の一端は、造船技術の発達史への展望や民具名の一覧作成などを行い、また東アジアを中心とする海外諸機関や学際的な研究者コミュニティとの連携の構築も進めることができた。

しかし、国際化というには、「常民文化」という概念が十分に浸透したとは言えず、比較研究の

対象国や民族をさらに拡大し、異なる文化圏を対象とした連携研究をさらに推進することが必要であり、第2期以降の事業の展開に期待するものである。

2015年1月吉日

国際常民文化研究機構第1期運営委員長
佐野 賢治